

## 独歩における佐伯

### はじめに

国木田独歩は、かつては、もっと多くの人々に愛読されていた文学者であった。が、今ではあまり顧みられなくなつた。福田恒存はそのことを『作家論』の中で、既に次のように述べている。

ぼくたちの——すくなくともぼくの——少年時代における独歩の影響は、現代の読者の想像もつかぬくらゐ大きなものでありました。今日の若い世代には、独歩はむしろ忘れられた作家に属するかもしれませんが、それはなにも独歩が古くなつたからではなく、時代が混乱し、文学概念がいまになつてしまつたからであります。独歩は近代日本の若々しい新鮮な魂の流露をその筆に託したひとであります。またその新鮮な流露感は今代においてもけつして古くなつてはゐないのであります。かれの作品はいまだに青少年の純粹な魂をゆりうごかす永遠の若々しさをもつてをります。

右に引用した福田の指摘のように、独歩は「近代日本の若々しい新鮮な魂」を表現した文学者であつた。しかも彼は、自然の美しさを見事に描いてみせ、その自然と調和して生きる人間の生命を豊かに表現してみせた文学者であつたのである。そういった意味において、彼は

## 工藤茂

もつとも現代的な文学者の一人だつたと言つていいかもしれない。その国木田独歩が、弟収二を伴なつて豊後の国佐伯にやつて来たのは、一八九三年のことであつた。一八九三年の今年は、それからちようど百年目にあたる記念すべき年である。

周知のように、佐伯は独歩の内面に大きな影を投げかけた土地であつた。佐伯における独歩の生活、独歩への回想、その作品については、既に小野茂樹著『若き日の国木田独歩』（昭和三四年・アポロン社刊）に詳しく述べられている。そこで拙稿では、彼の内面に形成されていつた、文学空間としての佐伯について考えていつてみたい。

### 一

一八九三年（明治二十六年）九月三十日正午、国木田哲夫は私立学校鶴谷学館の英語教師久代孝次郎の後任として佐伯に到着した。『欺かざるの記』の十月一日の項に彼はそのことを次のように書いてゐる。

二十九日午後（三ヶ浜）乗船、三十日正午佐伯着、（略）午後収二と共に近郊を漫步し高きに上りて遠望すれば佐伯市眼底にあつまる、（略）

右の引用で分かるように、彼は佐伯に着くやいなや、早速弟修二を伴つて近郊を歩き、城山と思われぬ所に上つてゐる。そして、このよ

うな散策は彼が佐伯に滞在している間中、しきりに行われたのである。来伯三日目の記は、以下の通り。

二日

(略) 坂本永年氏来ル、午後三時鶴谷学館に行キ幹事の諸氏と学課の事に就き相談する処あり

右に坂本永年氏とあるのは、元佐伯毛利藩の家老で、当時鶴谷学館の幹事(明治二十八年学館長)をしていた人のことである。このようにして佐伯の生活を始めた哲夫は、その翌年の八月一日佐伯を発つまで、約十か月の間佐伯に滞在することになる。

彼が佐伯に来た経緯については、既に書かれたものが多いので、ここでは詳説しない。ただ、『欺かざるの記』によると、彼が佐伯に来るについては、以下のようなことがあったことが分かる。

明治二十六年三月十九日の記に「吾断然文筆の人たる可きや、政治の人たる可きやの疑問は吾を五里霧中に迷はしむ」とあり、二十日の項には「吾は教師を希望す。吾に出来る丈の教師たる可し、人生の批評は吾が事業たる可し」とあり、さらに二十一日の記には「昨夜吾は断然文学を以て世に立たんことを決心せり。則ち「人間の教師」として吾が力に能ふだけを務めて此の世を終ることは最も吾が命運に適し、吾が生を値するを信じたり(略)吾は自ら大なる名譽高き文学者を希望するに非ず、文筆を以て小学校教師たるを得ば甘ずべし、只だヒュマニティーの自然の声を聞き、愛と誠と労働の真理を吾が能くするだけ世に教ゆるを得ば吾が望み足れり」とある。

当時彼は自分の将来について真剣に思い悩んでいた。そして、その結果、人間の教師たる文学者への道を選択しようと考えていた。だが、同時に彼は、社会の生活者にもならなければならなかった。

七月三十日

植村氏と会話、わが職業に就て同情を表せらるゝものゝ如し、曰くなる可く田舎に帰る勿れ東京に留まれと

八月一日

中桐確太郎氏より書状来り、福島民報入社をすゝめらる直ちに徳富氏に書を送りて相談す

(『欺かざるの記』)

早稲田以来の友人中桐から就職を紹介された哲夫は徳富猪一郎に相談する。徳富からの返事は三日に届く。その手紙には、新聞記者たらんと欲せば一日も早く地方に行け、一年地方で腕を練り、それから東京に打って出よ民友社に入れたけれどその余裕なし、来週面談せんと書いてあった。そこで哲夫は植村正久のところへ、なんとか東京で独り生活する職はないかと相談に行く。しかし、思わしい返事は得られなかった。

その月の下旬、父からの手紙を貰った哲夫は、いよいよ追い込まれてしまう。

八月二十八日

父より書状あり、愈々免職の由申来ル、来月の学費は送り難き由、母非常に苦心の由、申来ル  
われ自らの悲劇はそろ／＼始まらんとする也。

八月二十九日

午前徳富猪一郎氏を訪ふ、之れ職業に付き依頼する処あればなり。至急周旋の勞をとる可きをだくせらる。

九月一日

昨日中桐確太郎氏より書状来、民報社、猶ほ人なし、来りたくば来れと。

九月五日

民友社に徳富氏を訪問す。大分県に教師として行く可きをすゝめらる、矢野文雄氏へ推薦状を与へらる。

九月六日

午前矢野文雄氏を訪ふて教師につき相談する処あり。

九月十日

それより植村正久氏を訪ふ、(略)又た余が目下の処置に付相談あり。若し大分に行かぬならば東京に留まり日本評論の編輯を為しては如何とすゝめらる。

九月十二日

本日。午前中桐確太郎氏より書状あり。民報社、人を要し君を待つこと急なりと告ぐ。則ち矢野文雄氏に書状を以て大分教師の成否を問合はす。

右に引用してきたような状況の中で、哲夫が大分へ行くことに決つたのは、九月十七日のことであつた。それは九月十九日の記に、「前記は十七日に認めし也。認め終はりて直ちに矢野文雄氏に行く。愈々大分に教師として参ることに決す」と書かれてゐる。

九月四日に中桐確太郎宛に出した手紙によると、大分県の教師の口は月給が二十五円とある。それに續けて哲夫は、「若し小生が断言せる約束より言へば無論民報社の方に参るが当然に候へ共小生目下の事情なる可く俸給の多分を望む時に候間寧ろ教師の方に致し度きは小生の願ひに候」と書いてゐる。この最後のところ「寧ろ教師の方に致し度きは小生の願ひに候」という箇所、私は注目したい。先に引用した三月十九日、二十日、二十一日の記に見られるように、彼は「人間の教師」となることを希望していたのだから。

このようにして哲夫は大分県佐伯にやつて来たが、来伯前から彼は自分の天職が詩人であると考えていた。明治二十六年八月二日の記に彼は、「余は自分の天職が詩人なることを疑はず。神は必ず之れを命じ給ふ」と書きつけ、その理由を「務む可きは未来に来る時代を教ゆること也。余は顧みて、多少、教ゆ可き者を自ら有すると信ず。余は教へざるを得ず。ア、余は詩人たらざるを得ざる也」と書いてゐる。彼の理念においては教師と詩人、教師と文学者は同一概念だったのである。

## 二

佐伯に着いた哲夫が、東京にいる早稲田以来の友人田村三治宛に出した十月一日付のはがきには、「昨日正午佐伯着、京を發してより逢遇百端、多感の小生、或は失望し或は憤起し感慨千緒。(略)」と記されている。また、中桐確太郎宛同日付の手紙にも、「三十日正午満腹の不平を殺して佐伯に入りぬ」という文字が見えている。しかし、彦根の大久保余所五郎に宛てた十月六日付の手紙には、「佐伯は山水の風景には意外に富み山あり河あり海あり郊外の散歩に至極妙に候。食物は魚類沢山ゆへ毎日さし身の馳走あり滋養には差つかへ御座なく候」と、佐伯への好感を記している。つまり、彼の失望、不満は佐伯へのものではなく、おそらく東京に生活するに十分な職を得られなかつたことに、その端を發したものであらう。翌明治二十七年二月十日、十七日、二十一日、二十六日の『欺かざるの記』に見られる、鶴谷学館の一部生徒による反国木田運動に遭遇したにもかかわらず、彼はその晩年まで佐伯に思いを寄せていた。独歩南湖院入院中の談話を、真山青果が筆記した「病牀録」には、「武蔵野」の美を教えてくれたツルゲネーフについて「余は最早ツルゲネーフに飽けり」と語つてゐるのに、佐伯を一つの文学空間に変えたワーズワースについては、「余はウオヅオルスに負ふところ多し。(略)余の佐伯時代はウオルツオルスの崇拜没頭時代なり」と述べ、言外に佐伯に対する思いを現している。この思いがもつとはつきりしているのは、明治四十年一月一日、『新古文林』三巻一号に發表された「我は如何にして小説家となりしか」であらう。そこで独歩は佐伯のことを以下のように述べてゐる。

(略) 矢野龍溪先生の推薦で先生の郷里、豊後の佐伯で英語の教師をやつて一年計り居ました。此静閑なる一年間に自分は全く自然の愛好者となり、崇拜者となり、ヲーズワース信者となり、明

けても暮ても溪流、山岳、村落、漁村を遍ぐり歩き、溪を横ぎる雲に想を馳せ、森に響く小鳥の声を奪はれ、そして同時に、『牛肉と馬鈴薯』（自分の書いた小説）の主人公、岡本誠夫の煩悶と同じ煩悶を続けて居ました（略）

独歩はこの翌年（明治四十一年）に病没する。従つて彼の内面にはその死の直前まで、ワーズワースの詩の世界と重なる佐伯という空間が存在していたと言つてもいいであろう。この二つの空間を作品の中に定着したのが、「小春」という小品である。「小春」は明治三十三年十一月、つまり、彼が明治二十七年に佐伯を去つてから六年後に作られた小品である。そこに彼はワーズワースの詩、「ティンタン寺より数マイル上流にて詠める詩」の語句を引用しながら、次のように書いてゐる。

『月光をして汝の逍遙を照らさしめ、自分は夜となく朝となく山となく野となく殆ど一年の歳月を逍遙に暮らした。』山谷の風をして恣に汝を吹かしめよ、自分は我が情と我が身とを投出して自然の懐に任かした。敢えて佐伯を以て湖畔詩人の湖国と同一とは曰はない。然し湖国の風土を敍して

此処には雨、心より降り、晴るゝ時、一段眩ゆき天氣を現し、鳴らざりし泉は鳴り、響かざりし滝は響き、泉も滝も、水溢るれども少しも濁らず、波も泡も澄み渡り青味を帯べり、とゾーズワースが言ひしを真とすれば我が佐伯も実に其通りである。

ここには独歩の内面におけるワーズワースの詩の世界と佐伯との合體がある。もつとも独歩はその後に、「しかし強て我が佐伯をゾーズワースの湖国と対照する必要はない。（略）ゾーズワースは、決して写真的に自然を觀て其詩中に湖国の地誌と山川草木を説いたのではなく、たゞ自然其物の表象変化を觀て其真髓の美觀を詠じたのであるから」と断つた上で、「ただ一言する、『自分が真にゾーズワースを読んだ

は佐伯に居る時で、自分が尤も深く自然に動かされたのは佐伯に於てゾーズワースを読んだ時である』といふことを」と強調して書き留めてゐる。

この小品「小春」の「四」には、さらに彼が佐伯時代に書き留めておいた日記が引用される。明治二十六年十一月三日の記、二十二日の夜、二十六日の記。これらはそれぞれ、『欺かざるの記』の十一月四日、二十六日、二十七日の項に記録されているものの文学化である。少し長い引用になるが、二十六日の記を取り上げてみよう。

『欺かざるの記』十一月二十七日

「昨日は日曜日、午前、二十六日の日記を書し了はりて教会堂に出席す。たま／＼コリンタ前書十六章を読む、一席の感話を試む、なんぢらの目を醒し堅く信仰に立ち丈夫の如く剛かれの句に就て語る。午後取二と共に土河内村を訪ふ。堅田鑿道の前、左に小路にきり小山の間の小坂を越ゆれば一軒の農家、山の麓に在り。一個の男二個の少女、一個の妻、麦撒きの土作り居たり。少年あり同じく此家族の一人なる可し、藁の積み重ねし間より頭差し出して人々の働くを眺め居たり。渡を渡りて広き野に出づ、農夫野に出づる者多し。麦撒きの忙がしき時ゆへ女子皆な男と共に働き居たり。

山の麓に見ゆる一村は其の谷に迫まりて他所と並はず特別に世より離れて一村を作る如く見ゆるが故、遠くより望みて何となく懐しくなりし也。嘗て山の頂より眺めし時、煙立ち昇るを見て已に何となく懐かしかりし也

村に近くにつれて農夫等野に在るを見たり。犬吾等を見慣れず、甚だ吠ゆ

村は村なり、懐かしき村なり。小供等の遊ぶに遇ひぬ。馬の嘶くを聞きぬ。而も甚だ静かなるを感じぬ。壮丁庭先きに何事か働き居たるを見ぬ。井戸の傍に少女を見たり。水枯れし小川の岸に梅の古木並び立ちぬ。柿果星の如く其間に点ずを見たり。紅葉燃ゆる如く一叢の竹林

の間に樹つを見た。

此村、吾をして同情を以て人類の住所として観せしめよ。想ふに種々の悲しき、貴き、深き物語は此裡に在らん。生死も此村には見舞ふなり。時代も此村を運ぶなり、恋、恨、欲、義、友愛、義理、皆此村に在るなり。如何なる楽ぞ、此村の若者は夢むなる。何事なる希望ぞ此村の乙女は夢むなる、深夜此村に集まる天使幾人、悪魔幾人、詩神果して何れの時か此村の家々を音のふぞ、春か秋か、夏か將た冬か、嗚呼此村に生滅せし魂よ今爾何処に在る、

益々奥深く分け入れれば村窮まりて只溪流のみぞ愈々谷深く流れ来るなり。流に沿ふて上る、石に腰掛け足の下に咽ぶ水流を聞き、山谷の幽邃なるを聞き、小鳥の林間に囀るを聞く。かくして自然に近きぬ。帰路夕陽野に満つ。白帆を河流に孕まし上流にのぼる舟もあり。舟の人よ、御身達が家は何処ぞ、御身達の物語、語り聞かせし、此河をのぼり下りする人已に幾人、河依然として流れ、人自ら老ゆ。されど人情の至妙は老ひざる也。美は亡びざる也。人の永久の生命は老ゆることなし。」

佐伯の生活を記した右の文章は、「小春」に文学化されると次のようになる。

午後土河内を訪ふ。堅田隧道の前を左に小径をきり坂を越ゆれば一軒の農家、山の麓に在り。一個の男、一個の妻、二個の少女麦の肥料を丸め居たり。少年あり、藁を積み重ねし間より頭を出して四人の者が余念なく仕事するを余念なく眺め居たり。渡頭を渡りて広き野に出づ。野は麦撒に忙がしく女子皆な男子と共に働き居たり。山の麓に見ゆるは土河内村なり、谷迫りて一寰区を為し殊さらに世と離れて立つかの如く見ゆ、嘗て山の頂より遠く此村を望み炊煙の立ちのぼるを見て此村懐かしく我は感じぬ。村に近づくとつれて農夫等多く野に在るを見たり。静けき村なるかな。小児の群れの嬉戯せるに遇ひぬ。馬高く嘶くを聞きぬ。されど一

村寂然たり。我は古き物語の村に入るが如き心地せり。若者一個庭前にて何事かを為しつゝあるを見る。磔多き路に沿ひたる井戸の傍に少女あり。水枯れし小川の岸に幾株の老梅並び樹たり、柿の実、星のごとく此梅樹の際より現はる。紅葉火のごとく燃えて一叢の竹林を照らす。益々奥深く分け入れれば村窮まりて唯溪流の水清く樹林の陰より走出づるあるのみ。帰路夕陽野にみつ。

『欺かざるの記』の文章から、真に必要とするところだけを抜き出し、短いセンテンスによつて構成されたこの文章は、彼の内面に異化された文学空間の佐伯だと言つてよからう。同時にこの空間は、「今は自然を観ることを学びたり。今や人情の幽音悲調に耳を傾けたり。今や落日、大洋、清風、蒼天、人心を一貫して流動する所のものを感得したり」というワーズワースの視点に重なる独歩の眼によつて把握されたものでもあった。

### 三

「小春」の「一」に「これを手に入れたは既に八年前のこと、忘れもせぬ九月二十一日の夜であつた」とあるように、国木田哲夫がワーズワース詩集を入手したは明治二十五年九月二十一日のことであつた。塩田良平は「解説」に「ただこの年九月、はじめてジョン・モレイの解題によるマクミラン版ワーズワース詩集を入手し、これが彼の文学観に大きな影響を与えたことに注目したい。「田家文学とは何ぞ」(『青年文学』明二五・一一)は、このモレイのワーズワース観によることが多い」と書いている。塩田の指摘する「田家文学とは何ぞ」を見ると、彼のワーズワース受容のあり方が分かる。哲夫は「文人其の思想を田家の裡より求め、之れを現はすに田家の材料を以てしたる者」を田家詩人と見なし、「ウォルズウォースは何人ぞ。吾人思ふに、渠も亦一個の田家詩人なり」とする。そして、「ウォルズウォースに取りて

は帝位、戦争、地獄、天堂よりも賤が伏屋、谷の小がわ、森、或は岳陵の方、意味深か、りしなり、渠の最上の傑作と言はれたる、彼のミカエルは即ち老牧者の小話に過ぎず、ソリタリー、リーパーは即ちいなな娘の麦刈のみ」だと言ひ、「渠は詩眼を以て『人間は如何に生活す可きか』(How to live)てふ問題に付て感得したる理想をば、詩情を以て詩文に現はし以て同胞人類を真理と善徳に導く可き使命を有する者」だと見なすのである。ここに論じられてゐる詩人の態度は、そのまま『欺かざるの記』に刻まれていく哲夫の人生態度だと言つてもいいように思われる。それほど彼は、この詩集の影響を受けたのであつた。というよりも、彼の資質にワーズワースと共通するものがあつたと言つた方が、より正確なかも知れない。

彼にはもう一つ、ワーズワースを論じた「ウォーズワースの自然に對する詩想」という小論がある。明治三十一年四月の『国民之友』(二二卷三六八号)に掲載されたこの小論の内容は、この年より二年後に書かれる「小春」と重なるワーズワース論である。その前半部に彼は、ワーズワースを自然の詩人というけれども、我が国の歌人が花鳥風月に浮かれるのと同視してはならない。彼のは「自然の美の力を信ずる」のであり、「自然の奥には神」があるのだと断つた上で、この詩人について以下のように論じてゐる。

(略) 彼の自然に對するや、先づ深く自然より受けたる美の力を感じ、共感化を自覚し、而して後ち其力を信じ、而して後ち之れを賛美し、之れを詠じ、之れを主張したるが如し。乃ち彼は哲學者の如く最初より智を以て自然に入らず、情に由て感得し、然る後ち之れを思ひ之れを信じ、然る後ち之れを益々愛したるが如し、

(略)

ここには、哲學者でも宗教家でもない、詩人としてのワーズワースの特色が述べられてゐる。そしてその特質はまた、文學者独歩と共通するものでもあつた。

ところで、右の小論は發表された日付から考へて、彼の佐伯體驗以後に書かれたものと思われるが、それ以前に書いたワーズワースに関する一文が『欺かざるの記』明治二十六年九月十二日の項に見えてゐる。重要な内容と考えられるので、左に引用してみよう。

昨日午前「自然」に就き考究する所あり。ウォーズワースの詩を唱す。自然を思ふて人生を思ひ、人生を思ふて自然を思ひ、而して人間を思ふ、実に之れウォーズワースの思想の粹なり。彼に在りては自然の意と人生の義と決して分離す可からざるなり。故に草花、雲雀、泉流、平野、胡蝶、虹蜺悉く神の默示たり人生の秘奥たる也。吾亦近来思ふて自然に對する蓋しウォーズワースの境に遠からざるに至りたるを信ず。自然！今は意味深き者となりぬ。吾を自然の中に見出すを得たり。無辺の蒼空は吾が目前に開けたる尤も不思議なる自然なり。日光、綠葉、野花、泉流、虫声、は吾を神聖者の美妙に導くに非ずや、信仰の最も清き水を送るに非ずや。自然。人生。神。悉く吾に在りて融化する処を得たると信ず。

右の文章が重要だと考へるのは、ここに、後に独歩の内面においてワーズワースの詩の世界と佐伯とが、不可分に重なつていく原因が述べられてゐるからである。佐伯に赴任する直前に、右のような自然觀を得ていた独歩の眼に、佐伯の自然が右のように映じたのは当然のことであつた。そしてその自然が彼の内面において一つの文學空間となつた時に、「源おぢ」(明30)、「鹿狩」(明31)、「小春」(明34)、「春の鳥」(明37)などの作品が生まれていつたのである。

#### 四

独歩は「予が作品と事実」において、彼自身の小説を次の四種に分類してゐる。

第一、全く空想から人物も事件も出来上れる者、

第二、実際の人物若しくは事件にヒントを得たる者、

第三、事実の人物と事件が其小説の主要部を成せる者、

第四、実際の人物及び事件を其儘描写したる者、

その上で「第一」に属する者は極めて僅少である。第二第三が最も多数。

第四も又甚だ少数である」と述べている。そして「今思ひついた作物に就て簡単に説明すると」言つて、処女作の「源叔父」他九作品について言及している。このうち、「源叔父」「春の鳥」が、これまで述べて来た佐伯所縁の小説である。「源叔父」は短編集「武蔵野」に収められる時に「源おぢ」と直された小説であるが、この小説に就いて彼は次のように説明する。

◎源叔父（「武蔵野」に在り）は源叔父其人も「紀州」と称する乞食の少年も実在の人物である。余が豊後の佐伯町に居た時分常に接近せるのみならず言葉も交はし其の身の上に就き深く同情を持ちしことある人物である。而して此一編中に記述したる此兩人それ／＼の身の上の事も事実である。けれども此兩人を結びつけたのは余の想で、これを結びつけて初めて此一編が作品となつたのである。

右の説明によると、源叔父と乞食の少年「紀州」は兩者共に実在した人物だということになる。「欺かざるの記」を読むと源叔父についてはあまり判然とはしないが「紀州」に関してはその記述が見えている。しかし、今は亡き松本義一氏の調査によつて、源叔父も実在していたことが判つた。独歩はこの二人を結びつけるのに、次のような空間を設定する。

大空曇りて雪降らんとす。雪は此地に稀なり、其日の寒さ推て知らる。山村水廓の民、河より海より小舟泛べて城下に用を便ずるが佐伯近在の習慣なれば番匠川の河岸には何時も渡船集ひて乗るもの下るもの、浦人は歌ひ山人はのゝしり、最と賑々敷けれど

今日は淋しく、河面には漣たち灰色の雲の影落ちたり。大通何れもさび、軒端暗く、往来絶え、石多き横町の道は氷れり。城山の麓にて撞く鐘雲に響きて、屋根瓦の苔白き此町の終より終へと物哀しげなる音の漂ふ様は魚住ぬ湖水の真中に石一個投げ入れたる如し。

祭の日などには舞台据ゑらるべき広辻あり、貧しき家の児等血色なき顔を曝して戯れず、懐手して立てるもあり。

源叔父はここで紀州に遇う。妻と子を亡くした彼は、その乞食の子供を自分の養子にしようとするが、紀州は源叔父の家に居つこうとせず、源叔父は松に縊れて死んでしまう。この源叔父の最期を予測させる色彩が、この場面には流れていて見事である。

この小説にはまた、次のような美しい海の描写もある。

(略) 帰舟は客なかりき。醍醐の入江の口を出る時彦岳嵐身に滲み、顧れば太白の光漣に碎け、此方には大入島の火影早きらめきそめぬ。静に櫓こぐ翁の影黒く水に映れり。舳軽く浮べば舟底たゞく水音、あはれ何をか囁く。人の眠催す様なる此水音を源叔父は聞くともなく聞きて様々の楽しき事のみ思ひつゞけ、悲しき事、気がりの事、胸に浮ぶ時は櫓握る手に力入れて頭振りたり。(略)

源叔父の家は桂港にあった。その葛港の岸に哲夫が居を移したのは、明治二十七年七月一日日曜日のことである。そこは蒸気問屋で旅館を兼業していた。葛港に来てから、哲夫はよく、夜、舟を海に泛べて漫航した。七月二十三日の「欺かざるの記」には、「昨夜涼風に乗じて宿処の主人等と語る、夜更けて雨をきつゝ一文を草じぬ」という一行がある。記の日付を遡れば、前年十一月六日の頃に船土町の川岸から川船に乗った体験が刻まれ、同船した者たちのこと、船頭のこと、船が書かれている。同月七日の記にもそれが見える。十一月二十六日の項には佐伯の海岸、船頭河岸の様子が描写されている。そして二十七日の記には、「昨夜、二階を下り坂本老人と語る、佐伯に一個の老翁あ

り。奇怪の者を担ふて行くをしばく見受けぬ此老翁の事を問ひ、多少聞き得たり。此翁同情に堪へず何れの時か遇ふて親しく語る可し」という一条がある。これらの経験が総合され、統一されて後に「源おぢ」という小説が生まれたのである。この小説の空間は、哲夫の佐伯体験が異化によつて創り上げた文学空間だったのである。

もう一つの小説「春の鳥」については、既にこの紀要に「独歩『春の鳥』考」という小論を発表しているので、詳しくは触れない。ただ、どうして「源おぢ」の紀州や、「春の鳥」の六蔵が独歩の作品において重要な位置を占めるのかについて、ひとこと触れておきたい。『欺かざるの記』明治二十七年五月四日の項に、その理由を示す次の記事がある。

自然は己れを愛する者に負かずと実に然り

爾、心からして小児を愛せよ、小児の無邪気なる品性は忽ち爾の心の泉に流れ入る可し。爾、心からして春を愛せよ、草木の美、を愛せよ更らに進んで永久の生命なる天地の靈を愛せよ。爾の生命も亦真実にして永久、美にして楽しき、堅実なる生命とならん。此れ言葉に非ず、

今ま高瀬の統坊来りぬ。此の七歳の小児は無類に無邪気真率なり。吾小児を愛するの性癖あり、今にして、実に幸なる吾が性癖なりしを知りぬ。

統坊去りて感ずること此の如し、記し置く（八時四十五分）

統坊というのは全集の注によると、後に佐伯市収入役になつた高瀬統成氏のことだといふ。乞食の少年、知的障害児の六蔵が、作品上に重い地位を占めるのは、独歩の以上のような思想と、その性癖に由来するものようである。

## おわりに

国木田独歩において、佐伯とワーズワースの詩の世界は分かち難く溶け合つていた。彼はそのことを「不可思議なる大自然」（『早稲田文学』明治四一・二）の中に、「余が初めて短篇小説を書いたのは今より十年以前である、それより更に五六年前余は寛東なき英語教師として豊後国佐伯町に一年間滞在して居たが、当時余は最も熱心なるワーズワース信者で、而てワーズワース信者に取りては佐伯町は実に満目悉くワーズワースの詩編其物の感があつたのである。山に富み溪流に富み、溪谷の奥に小村落あり、村落老て物語多く、実にワーズワース信者をして「マイケル」の二三は此処彼処に転がつて居そうに思はしめた位である」と述べている。そして「源おぢ」の誕生に關しては、「既にワーズワース信者である限り、余は自然を離れてたゞ世間の人間を思ふことは出来なかつた。人間と相呼応する此神秘にして美妙なる自然界に於ける人間なればこそ、平凡境に於ける平凡人の一生は極めて大なる事実として余に現はれたのである。其処で豊後に滞在五六年度の後、余は初めて源叔父なる小説を作り其主人公の一人は乞食児紀州であつたのである」と書いている。そこで私は、独歩のワーズワース受容の姿、佐伯体験とその関連を求めてこの論を展開してきた。ここには書き洩らしたが、彼が佐伯に来て城山のうしろ、若宮八幡の杉の梢に鼻声を聞いた時、直ちに想起したのはワーズワースの「二人の少年」(There was a boy)と云う詩だつたに相違ない。「豊後の国佐伯」の「一 鼻声」、「小児の時習ひ覚へたる如くに十指を組みて笛となし、試みに彼れの声を横して応ずれば、彼れ更らに寂寞の調を以て答ふ」という部分を読むと、そう思わざるを得ない。それを、坂本永年に教育を依頼された少年山中泰雄と結びつけた時に、「春の鳥」の構想はなつたと思われる。しかし、小説「春の鳥」は、ワーズワースの詩を一

歩抜け出して、独歩独自の文学空間となっていたのである。そこに私は、独歩の内面における佐伯の姿を見るのである。

注

- (1) 川副国基の「よい論文、悪い論文」(『近代文学論文必携』昭和五十年・10版・学燈社刊)に「また独歩の『欺かざるの記』にしても全集収載のものより河出文庫の方が詳しいというようなことを知らないで」とあるように、河出文庫の『欺かざるの記』の方が全集のそれより資料としての価値が高いようであるが、今手元に文庫のそれがないので全集の『欺かざるの記』を使った。

(2) 『欺かざるの記』から引用。

(3) 岡本の煩悶というのは、この小説によると、「吾とは何ぞや」「我何処より来り、我何処にか往く」「信仰無くしては片時たりとも安ずる能はざるほどに此宇宙人生の秘義に悩まされんこと」という問題を抱えての煩悶であった。

(4) 「小春」の中のワーズワースの詩を要約した部分から引用した。

(5) 『国木田独歩集』(日本近代文学大系10・昭和45年・角川書店刊)の「解説」

(6) 「この年」というのは、明治二十五年のこと。

(7) 独歩の作品で佐伯の登場するものはその他に以下のものがある。

明治26～27年

「元越山に登ル記」

「憐れなる児」

「信仰生命」

「潔の半生」

「わが土曜日の夜」

明治28年

「豊後の国佐伯」

作品以外の文章

「欺かざるの記」(明治26～27年)

「我は如何にして小説家となりしか」(明治40年)

「余が作品と事実」(明治40年)

「不可思議なる大自然」(明治41年)

「病牀録」(明治41年)

(8) 松本義一『大分文学紀行』(昭和59年・アドバンス大分刊)に、次のように書かれている。

「略」源叔父その人のモデルが一切不明なので、わたしは非常な苦勞を重ねてその探究に当たった。その結果、若き教師に源叔父の身の上を語る宿の主夫妻が鎌田清作(当時四十一歳)とヨ子(三十七歳)であり、さらに源叔父一家の人々は、鎌田旅人宿の並びの、しかもごく近くの市谷地区に住む高原嘉治郎(渡船業、二十九年十一月一日没、年五十三)・妻コト(二十三年五月二十八日没、年四十五)・一子亀太郎(十二年十一月十九日没、年六)らであり、嘉治郎のふるさと、西上浦村小福良の落網代(現佐伯市)には嘉治郎一家の合墓もあり、一子亀太郎が作品のそのように水におぼれて死んだ事等を明らかにしえた。」